

釣りと流網によるアカイカの同時試験操業 (要旨)

Jigging and Drift-net Survey on the Neon Flying Squid, *Ommastrephes bartrami* in the Northwestern Pacific

中田 淳
Jun Nakata

北海道立中央水産試験場（現在は北海道立稚内水産試験場）

アカイカを漁獲する代表的な漁法として釣りと流網がある。これら2つの漁法特性と漁獲物の違いを検討するため、1985～1987年9～10月に道東太平洋海域に調査点を設定し、試験調査船旧おやしお丸(237.24t)では釣り、旧北辰丸(219.5t)では流網により、同一調査点で同一時間帯にアカイカの漁獲試験を行い、アカイカの分布と海洋構造の関係、外套長組成、食性および混獲生物などを比較した。おやしお丸では自動いか釣機7～8台と集魚灯を装備し、パラアンカーによる漂泊操業を行った。一方、北辰丸では12～13種目合流網(29～157mm目合、公比1.14)37.7～81反(60間切り換算)を用い、おやしお丸の集魚灯の影響がないように、数マイル程度距離を離し東西方向に流網を設置した。漁獲試験は原則として日没時から日出時までの夜間10時間ほどとしたが、1987年には日中のアカイカの分布を調べるために、昼間にも行った。

①3か年の調査で、流網、釣りとも計15回ずつの夜間操業を行った。流網では延べ投網反数68.1.9反で3,647尾、釣りでは800.9(釣機×時間)で、5,553尾のアカイカを漁獲した。このうち同時操業は14回であった。

②1987年には夜間に漁獲のあった調査点で、昼間に同様の漁獲試験を行ったが、流網、釣りともアカイカは漁獲されなかった。

③釣りのCPUE(釣機1台1時間当たりの漁獲尾

数)と流網のCPUE(有漁10種目合流網1反当たりの漁獲尾数)の間には明瞭な関係が認められなかつた。

④1986、1987年の調査海域は亜熱帯域、移行領域および亜寒帶領域に相当していた。

1986年では、釣りのCPUEは亜熱帯域で高く、流網のCPUEは移行領域、亜寒帶領域で高い傾向にあつたが、1987年では、釣り、流網ともCPUEは亜熱帯域で高かつた。

⑤流網によるアカイカの漁獲は、1986年では55～72mm目合、1987年では72～82mm目合で多かつた。

⑥アカイカの外套長組成、成熟度組成、性比(流網では10種目合流網で標準化)には漁法による違いは認められず、調査点の南北あるいは東西による違いが明瞭であった。

⑦胃内容物組成では、空胃個体の割合が流網で極めて高かつたが、空胃個体を除いた組成では漁法間で似ており、主に魚類、イカ類および甲殻類が摂餌されていた。

⑧流網による混獲魚は、年、調査点による違いがあつたが、サンマ、サバ類、シイラ、カツオが多かつた。

なお、本調査結果の大部分は、北海道立釧路水産試験場事業報告書(中田ほか1987; 中田ほか1988)に印刷公表済みである。